
月の桂 3

cassander

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の桂3

【Nコード】

N7639T

【作者名】

c a s s a n d e r

【あらすじ】

姫と少将は、図らずも月の夜に出会う。少将がほかの女との別れを告げられたその時に居合わせた。姫は、物陰から二人の様子をのぞき見し、大人の恋に憧れを深くする。

(前書き)

巡りあい

秋から冬へと季節が変わる風が強く吹いた、ある夜、美鳥が遅く私の部屋の戸を軽く叩き、言った。

「お休みでいらっしやいますか」

「お入りなさい」

廊下にまた軽い足音がしたので、跡を追って秋枝が来たのが解った。

「秋枝、台所に行つてなにか点心でも貰つておいで。美鳥もあなたにもね。私がそう言っていると誰かに頼むといいわ」

「誰か来た音がした物ですから。美鳥さんだったの」

秋枝も食べ物があるのは嬉しいらしく、喜んで台所へ行つた。美鳥に何事かと聞いた。

「式部の君の所に少将様がお見えになつています。お池の傍の廊下で話し込んでおられます。見に行かれますか」

「こちらの対を見られないかしら」

「陰がありますから、お二人から見られる事はないと思います」

「行きましょう。どんな方が知りたいわ」

白い下着の上に、普段着の小袿を頭から被いて部屋をでた。廊下の暗い所をよつて進み、寢殿の池の見える廊下の陰に忍んだ。二人は少し離れて座り、式部の君は扇で軽く顔を隠していた。少将様は浅く腰を掛けて、しなやかに優雅な姿で、月明かりにもつやつやと光る白か銀色の直衣と濃い色の袴を着けていた。風が軽い諍いの声を運んできたと思うと、式部の君が急に立ち上がり、日頃の優雅な拳措に似合わない、切りつける様な口調で言った。

「本当に噂通りの浮気な方ね。あなたの言葉を一言でも信じた私が馬鹿でしたわ」

「噂よりも私自身を見て下さい。いつも本当の事を言っておりますよ、あなたには」

浮気な方という限りは、式部の君が少将様の遊び心を責めているの

だろう。式部の君は、裾を掴んだ少将様の手を払って、衣擦れの音を残して去った。少将様は、月を見て、佇む風情だったが、喧嘩の後の寂しさとは、どこか異なる冷たく硬い立ち姿だった。美しい大人の男性とはこういう方かと、私には新鮮な驚きだった。雲が月にかかり、少将様を隠したり現したりしても、どうしても目が離せなかった。じつと見つめてしまふのだった。

秋枝がばたと騒がしく私たちを探しに来た。少将様がその足音で、私と美鳥を認めた。少将様から私の姿は見えないはずだと、私は大胆に少将様を見た。その時雲が晴れて、月が私のいる隅を照らした。少将様と私の視線が合った。悔しかった。私が式部の君のように優雅な大人の女ではなく、少将様にとっては、まだ子供に過ぎない事、将来が決められた身だという事、少将様が想像していたよりも遥かに好ましい方だった事、それら全てが一気に心に押し寄せ、無性に腹立たしかった。

「姫様、早く寢所にお戻り下さいませ。点心をご用意いたしました」少将様は、微かに私に向かって頷かれた。よりによってこんな時に食べ物の事をいうなんて、心の混乱を全て秋枝の責任だと無理にも思った。私の姿を少将様が視線で追っているのは感じ取っていたが、もう振り向く勇氣は無かった。

（まだ夜食を欲しがるような子供だと思われてしまった。こんな時に大声を出さなくてもいいのに。もっと安全な場所を探すべきだったわ。美鳥も悪いのよ）

私は部屋に入るなり、二人には物も言わず、几帳の中に逃げ込み、小桂を頭から引き被いて伏せた。二人は他愛ないおしゃべりをし、何かを食べ終わると、お休みなさいと言い、部屋に下がった。

あの時の少将様の軽い会釈は、流れるように優雅な身のこなしで、美しかった。私は夜食を欲しがるような、まだ子供だと思われるに違いない。惨めさと悔しさで涙がじわりと湧いてきた。もう二度とお目にかかる事は無いだろうと思うと、更に涙が溢れた。式部の君と争いをなさっていたので、もうこの家を訪ねられる事もあるまい。

あのように見識高い君が、ああまで手荒く裾を払って去っていかれたのだから、二度と少将様に会われるはずはない。それにしても、あの少将様を振り払えるなんて、なんと高慢な人だろうか、可笑しな事に式部の君に腹が立った。それから暫くの間、式部の君の講義は沈んだ物だった。私も不満そうな顔をしていたのだろうと思う。秋枝と美鳥さえ時々私の顔を盗み見る程だった。

「式部のおもと、どうか耐えましたの。この所お加減が悪そうに拝見しますが」

私は自分でも意地悪だと思いながら尋ねた。

「いいえ、特になにも。たまには姫君のお好きな話をして差し上げたいと、常々思っております」

内裏の話を聞けば少将様の噂も少しは聞けるかもしれない。

「叔母の女御様の所においでになった事がありますか」

「私の従姉妹がある更衣様にお仕えしております、何度かお部屋に参りました」

「局には女性ばかりがいるのですか」

「いいえ、殿上人や蔵人達はいつも更衣様、女御様方と帝の御使いに行き来なさいます。また、殿上の間に詰めておられる方々が色々の遊びにつけて、文を持参し、そつと女房を訪ねてこられて、几帳越しに話をなさったりします」

「いつかの蛸の歌の少将様も、その中にいらっしゃるのですか」

式部の君は苦しげに答えた。

「あの少将様は、どんな女性でも文を差し上げると、必ず恋人にしておしまわれるとか。その方面の噂には事欠きません。貴いお生れと和歌の才能とで、女性達には人気がありますよ。和歌といえば、あの方にはこんな和歌もありました。

・ ・ 行きやらぬ夢路を頼む袂には 天つ空なる露や置くらむ ・ ・

あの方さえも拒む女性がいるのですね。女性が薄情なのか、少将様

の浮気な心情を知って会わぬと思われたのか。毅然とした女性だと、私には思えます。まあ、これは姫君のご学問にはなりません」

聞き様によつては、とてもやるせない声で笑つて言つた。

「とても面白い話ですわ。もつとお聞かせ下さい」

「姫君は、もつと自由にお暮らしになれば、どんなに素敵な方に成長なさるだろうか、かねがね拝察いたしておりました。将来の事を考えますと、もつと見聞を広めておかれるのも大事な事かと、私には思えます。内裏は大層難しい世界ですから」

「お母様とお父様に、このままでは帝のお役に立てるだろうかと心配だと、言つて下さい。きつとあなたの言われる事なら、両親も聞いてくれると思います」

「そのような失礼な事を申し上げる訳には参りませんが、内裏には色々な人が住みますと申し上げましょうか」

「内裏とは、そんなに恐ろしい場所なのですか。物の怪などもありますの。怖い事もあるのでしょうか」

思わず美鳥が口を挟んだ。式部の君はにっこりして答えた。

「色々な物の怪が現れるそうですよ。夜毎にあるお名前を呼びつつ歩く大きな僧の姿が見られたとか、ある歌を繰り返し歌いつつ、毎夜徘徊する物の怪も見られるとか。その異形の物よりも恐ろしいのは、内裏の女性達の駆け引きだそうです。あのような世界には、姫君ほど真つ直ぐな気性の方は多くはおられません。世の尊敬を受ける立派な女御様におなりだろうと、私は固く信じております」

感情の籠つた言葉に、私は感激した。それでも、心は重く沈んだ。「なによりも内裏は清々しい場所です。その清らかさを保つ事が女御様の大切なお役目でしょうね。叔母君の女御様の里下がりの前には、宴が開かれるでしょう。その宴に伺えば如何ですか。それも姫君のご学問の一つだと、北の方様に申しあげましょうか」

少将様もきつと宴にはおいでになるだろう。行きたいと思った。美鳥も秋枝も懇願するように言つた。

「私達も姫君とご一緒に伺えるのでしょうか」

式部の君は苦笑して言った。

「殿様にお願いなさいませ。姫君は行儀見習いという事で、お許しが叶うと思います」

「まあ、私達も行儀見習いしなければ、姫君にお仕えできません」美鳥が泣き出しそうな声で言った。式部の君はころころと清らかな声で笑った。私はそれ以上みんなの言葉が耳に入らなかった。少将様に会えるかもしれない。直ぐにお父様をお願いの文を書いた。しばらくしてお父様から宴の後でならば、女御様の元に少し滞在してよいと返事があった。美鳥と秋枝もこの度は私に従って来て良い事になった。お母様と侍女達は、私の衣装だけでなく、みんなの支度まであり忙しかった。お母様はもう二人、見た目の良い女童を連れて行く事に決められた。小さな子たちは揃いの秋の衣装を着せられて、とても可愛らしかった。中に一人飛びぬけて利発そうな、多恵という子がいた。色の白い目鼻立ちの整った子で、背丈が小さく十歳ほどかと思えたが、実は私と同じ年だった。美鳥よりも遥かに大人びて機転の利く子だった。美鳥とはすっかり仲良くなったが、いざとなると二人は何かにつけて張り合った。私よりも五歳年上の秋枝さえ、多恵よりも幼く見える程で、多恵は本当によく気の回る子だった。

「姫君はいつもじつと物をご覧になるのですね」

しおりでとんとんと本を叩くと、また多恵が言った。

「その癖も、とても可愛らしくていらっしやるわ」

「どんな癖」

「考え事をなさる時は、いつもそのしおりでどこかを叩いていらっしやるのです」

「気がつかなかったわ」

「姫君らしい綺麗な物を御使いになれば宜しいのに」

「使い慣れた物だし、これで良いのよ。しおりなのだから」

確かに実用的な物だが、しおりの役目は果たしているから、それで良いと私には思えた。

「飾りがしおりに必要なのかしら」

「そういう風にお考えになる姫君が、何故かとても好きですわ」

多恵が弾むような声でいった。

「美しい物はそれだけで充分素敵だけれど、日常に使う物にはそれなりの役目があるはずでしょう。だからこれはこれでいいのよ」

「式部のおもと言われた通りの方ですね、姫君は、芯のしつかりなさった方だと常々言っておられます。それに物の基準に揺るぎが無い所が貴重な方だともいわれました」

「式部の君はとても難しい話をなさるのよ」

多恵にした所で本当は何も解ってはいなかったはずなのだ。その時に何が先に待っているのか、式部の君だって解らなかったのだから。

（後書き）

高子は、この時から少将に想いを寄せるが、二人がめぐり合うのはいつになるのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639t/>

月の桂3

2011年10月9日04時46分発行